

メンズ” あいあう

創刊号

特集1／なぜ今メンズあいあうなのか〈対談〉本多 祐徹×巨津 善祐

特集2／孫と私の男女共同参画 中村 彰

特集3／疑謗を縁として―「変成男子」について考えてみませんか?― 大窪 祐宣



エッセイ 女のささやき『2つの流れが交わる場所に』藤沢 紹子
男のつぶやき『カノジョとボクの共同参画』土屋 慶史

なぜ今

『メンズあいあう』なのか

対談

本多祐徹
×
巨津善祐

あたらしく「メンズあいあう」を創刊することになりました。

メンズというからには、男性に読んでもらったり、
参加してもらったりすることを願いにしているわけですが、
なぜ今、それが必要なのか、女性室の男性スタッフが対談しました。
時には周囲の男性たちから「女性室で何をしているの？」
といぶかしげに質問されたりしながらも、一人の男性である一住職として、
これまで女性室にかかわる中で様々なことを感じてきました。
そんな思いを伝えることによって『男たちの寄り合い談義』に
これから一人でも参加していただけたらと願っています。

■本多 子どもの頃「女はお内陣にあげるもん
じゃない」ということを何とはなしに聞いてきま
した。宗門では少し前まで正式な場では、女性
は教師資格があっても入れるのは余間まででした。
部落差別の事件とともに女性への差別的な扱い
が宗門で問題になり、それについての部落解放
同盟からの糾弾も経て一九九一年以降制度改正
がなされ、今では女性も住職になり、内陣に出
仕するようにもなってきました。ところで私た
ちは「なぜ男だけだったのか？」ということとき
ちんと問うてきただろうかということは今あら
ためて思うんです。

聖道門仏教のように、内陣に女性が入ること
が修行の妨げになるというわけでもないのに、い
わば大谷派版の女人禁制のような領域が少し前
まであった。仏教の、いや教団の歴史を見ても
抑圧され排除されてきた場面は、やはり女性の
側に多いと思う。その事実を事実として受け止
めた上で、私たちは、「僧と俗」という視点と
ともに『男と女』という双方の視点をもって教
団や寺の現状を問い直していく必要があると思
います。その時に「なぜ男だけだったのか？」と

いうことをどれだけ深く問うことができるかだ
と思うんです。その中から宗祖が比叡山を棄て
られたことの意味が少しでも見えてくるんじや
ないかと思うんですが…。

□巨津 「なぜ男だけだったのか？」ということ
は、しっかりと過去を問うていく必要があります
し、その過去の「男」と言う言葉に対して「女」
ということがどれだけ考えられていたのかも研鑽
しなければならぬでしょうね。

私の父（前住職）が脳溢血で倒れ半身不随の
生活になったときから母（前坊主）が、法務・
家事など全てしてきたのですが、本堂でのお勤
め（年中行事）の時は内陣に座らず、得度した
ての私に出仕させてきました。そこには母の意
識に内陣は女人禁制ということがあったのでし
ょうか？

私は「早くお前に後継者として頑張ってほし
い」との願いを感じてきたように思いますし、私
自身の問題として、お寺・本堂・内陣・下陣・
住職・坊主ということは何もわかっていなかった
のですが、当然のように振舞っている自分がそこ
にありました。

■本多 「本当はどこに座ってもいい、浄土とい
う絶対平等の世界を表現しているのが内陣で、
そこに優劣の価値観をもたせること自体に問題
があるんじゃないのか」という考え方があります。
それに対して「それは男性の論理だよ。内陣
出仕のことばかりでなく、制度が開かれても、
女性は初めから無意識のうちに排除されている

本多祐徹

ほんだ ゆうてつ



現実がある。女性が入っていくには、いろんな場面により積極的な制度改革が必要だ」という主に女性の側からの主張もあります。

女性たちのそういう声を認めながらも、うまく言えないんですが、「男性の論理」とひと括りにされると、どこか抵抗感をもってしまうところも私の中にあるんです。

強引に上意下達で制度改革をしていくことが必ずしも広く受け入れられ、力になっていくとは思えません。また同時に、「信心」とか「内観道」という言葉で説かれてきたことが、一つ間違えると『忍従の美德』として現実の問題を個人の心の問題にすり替え、立ち上がろうとする人を押さえ込んでいく装置になる危険性があるということも思います。その両方に心を配り、緊張関係をもつて考えていきたいと思っています。私はこのごろ、上に上がれない人の側より、降りられない側、つまり男の側にこそ深刻な課題があるように思います。そういうことを教えてくれたのが味沢道明さん(※)のDV加害者ケア

巨津善祐

おおつ ぜんゆう



という問題です。味沢さんは被害者のケアもするけど、それと同時に加害者が救われなかったら本当の解決にならないということを教えてくれました。真宗の教えも結局そういうことだと思えます。もつと言うなら加害者もまた社会のしくみの中における被害者の一人なんだという視点をもつということですね。

男社会は顕著に能力主義的で、同時に背負わされているものがあります。その重荷に押しつぶされるか、攻撃的・暴力的になるかという形でいろんな問題が起ってきています。今の世の中、男が素直に弱音を吐ける場が必要なんじゃないかな。

■巨津 自分の過去を振り返ると、どこかで被害者意識として寺に長男として生まれたこと、父の代わりを早くしなくてはならないと自分の選んで僧侶にならなかったことに、選びなく生きてきたことに被害妄想をもってきました。

私の弟は寺に次男として生まれ、今は他の寺

に養子として入寺していますが、弟もまたそんな思いをもっていたと思います。

私の連れ合いもまた寺に生まれた次女ですが、次女として生まれた時からお寺に嫁いでいくという周囲の雰囲気を感じながら育ってきたのでしょう。

生活の周りには沢山の被害者意識でいるものがあることには了解できるのに、その被害者が加害者になっていくことに対してはなかなか了解できないのですよ。

そういうことから女性室が、女性の問題は男性の問題なんですと言いつつ続けていることに繋がっていると思っています。

■本多 被害者とか加害者とか、そういう関係を生み出している根っこにあるものが何かということですね。教団でも性差別についての取り組みが少しずつ進められてきましたが、何か女性たちの思いとか合わないんですね。たぶんそれは男性自身の在り方を問うということがないまま女性の方だけを問題にしてきた、つまり女性をどうしてあげればいいのかという方向で男たちが考えてきたことに原因があるのかなと、この頃感じます。長く課題になっている坊守の問題も、結局は住職が問われている問題なんですけど、その先が見えてこないということだと思っています。

その一番根っここのところに係わる問題を、肩の力を抜いて「男」を語り合うところから少しでも明らかにしていきたいし、この「メンズあいあう」がそんな語り合いの場になればと思っています。

※味沢道明(あじさわみちあき)

京都市山科区にて(有)日本家族再生センター所長としてジェンダー理解に基づく男性の非暴力支援を国内でも先駆的に行っている。さらに加害被害をこえた世界でも例を見ない複合的援助を手がけている。



孫と私の 男女共同参画

メンズセンター 中村 彰

1947年大阪府生まれ。オフィスなかむら代表。

メンズセンター運営委員長

専門分野 男性学、ジェンダー論、メンズリブ、
男女共同参画社会論、文化人類学。

著書『男性の「生き方」再考』(世界思想社)、『わたしの男性学』・
『全力疾走した男たち』(ともに近代文芸社)、他。

男

男性として生まれ、「男らしく」を求められて生きてきた。「勉強ができない僕」「運動ができない僕」「失敗ばかりしている僕」など、マイナス評価で生きてきたように思う。「満点ではないけれど、僕なりに頑張れたよ」「ささやかでも、これはやり遂げたよ」とプラス思考で自分を見つめられるようになったのは、メンズリブ、男女共同参画に出会ってからである。

いまの社会システムのなかで、女性が自己実現をはかるとき幾多の障害があることも、その問題を解決するために男女共同参画の実践が始まったことも理解しています。女性にとって自己実現を阻む社会システムは、男性にとっても決してバラ色とはいえない社会である。私はメンズセンター(Men's Center Japan)の活動を通して、「女性を抑圧することなく、男性が自分らしさを発揮できる社会」の実現を訴え、環境づくりを呼びかけている。

三歳の孫がいる。男の子である。一緒に暮らしているわけではないが、近くに住んでいるので、ときどき訪ねてくれる。

彼はクルマが大好きだ。一緒にいると、通りすぎるクルマを見て「ダンブカーだよ」「宅急便だよ」「消防ハシゴ車だよ」と私に声がけしてくる。一緒に楽しもうというわけだ。

特に工事用車両が好きだ。工事現場の近くを通りかかると離れようとしない。ブルドーザー、パワーシャベル、クレーン車……。ひとつひとつ確認している。私の知らない特殊車両も知っている。

「〇〇で工事しているよ」と彼から近所の情報を得ることがある。

最近、宅急便のダンボール箱がお気に入りだ。宅急便のトラックの図柄が描かれた箱だ。その箱を使って、おもちゃやタオルなどいろんなものを入れて押して行き「宅急便です！受け取ってください！」と声がけをする。また、箱の中に座って、運転手のつもりになっている。「やっぱり男の子」と周りは見ている。

彼

彼は、ままごと遊びも大好きだ。「後片付けしているのだ」と言って、お鍋の底まで洗う真似をしている。嬉々として遊んでいる。

デパートのおもちゃ売り場に行くと、自由に遊べるおもちゃが置いてある。いろんなものに興味をしめすが、ままごと遊びのおもちゃコーナーで大半を過ごしている。

台所で、大人が料理をしていると自分も手伝おうとする。先日、私たちと息子の家族で、すぎ焼きをした。三歳の孫が、家族みんなの取り皿に生卵を割り、すぎ焼き鍋に野菜を入れる役をした。いわば鍋奉行をしてくれた。

子どもが、性別ではなく、その子なりに身近な暮らしのなかで成長する社会であってほしい。



私

私も最近まで台所に立つという習慣がなかった。

子どもの頃は母親の料理を、結婚してからは妻の料理を食べてきた。母親の味付けと妻の味付けでは、ずいぶん違いがある。好みが異なる。どちらに対しても文句を言うことなく出された料理を食べてきた。

自分は固めのご飯が好みなのだが、柔らかい飯が出されれば食べてきた。ご飯の炊き加減にも口をはさまなかった。大人になってからは、仕事に追われ、もともと、料理をつくったことのない私は、他人任せを続けてきた。



妻

妻が入院することになった。食事をどうするか、はたと困った。生活力のなさに愕然とした。食生活の力量が上であつた息子たちにはずいぶん助けてもらった。

ある日、私は奮起した。「料理教室に通う」と宣言した。料理のイロハも知らない四十歳代後半の私は、先生が次々求める手順についていくことができなかった。挫折はしたくなかつた私は、まずは「味噌汁だけでも」と思い、朝食当番を進んでするようになった。

だし雑魚をどうするか、味噌の量はいかほどか。具を何にするか。日々、悪戦苦闘するうちに、台所が面白くなってきた。たとえばケーキづくり。「自分がおいしいと感じる甘さを出すために、こんなにも砂糖を入れるのか」と新しい発見である。「それなら食べる量を減らそう」と思った。自分が料理をつくることで、ただ食べていただけでは知ることができない新しい発見の連続だった。いっしょに料理にのめり込んでいる私がいいた。



ぎ ほ う

疑 謗 を 縁 と し て

へん じょう なん し

—「変成男子」について
考えてみませんか?—

無量寿經』で説かれる第三十五願のことです。

たとい我、仏を得んに、十方無量不可思議の諸仏世界に、それ女人あつて、我が名字を聞きて、歓喜信樂し、菩提心を發して、女身を厭惡せん。壽終わりての後、また女像とならば、正覺を取らじ。

（『真宗聖典』二一〜二三頁）

この本願などに関して私の感じている問題点については、以前に『身同』第18号で「女犯する男性性を信仰課題として」と題して不十分ながらも書いたことがあります。

そこには、この本願は男達とは違つた女達特有の苦悩の重さに気がついたことから発願されたもののはずですが、しかし、衆生に別して、男に別して、女を課題にした本願をおこさせた女達特有の苦悩の現実、その現実に対して女身を厭惡せよと答えてしまった仏教。そこには、その女達の苦悩の中に、男達からの性差別によつて受けている苦悩を見て取れずに、女の性自体に問題（罪）があつて、そこから苦悩が生じているとしてしまった、そういうおおいなる「誤解」があつたと述べました。

言うまでもなく、「女身を転じて（男子となす）」という形で女人成佛を説いている經典は『無量寿經』だけではなく、『法華經』『大宝積經』『大樹緊那羅王所問經』など数多くあることから、仏教全体の一般的な考え方だつたと言えます。そこに出てくる「変成男子」という考え方は、女達を救済しようとする法藏菩薩の願いと女は仏にならないとする五障説との狭間にあつて、ようやく編み出された方法論であると私は考えています。しかしそれは、五障三従と言われるような問題（罪）が女の性そのものから起こっているものとする誤解に端を発していると思います。

そのような誤解が生まれてしまった原因は、五障説そのものを疑い問い直すということをしなかった、それを自明の理としてしまったからではないでしょうか。

— * —

ここで存覚上人の『女人往生聞書』にまとめられている五障三従説を見てみます。

第十八願に重ねてことさらに第三十五願をおこしたのは「女人はさほりおもくつみふか」いからであつ

て、それを証明する經論の文言を列挙して、さらに、

うちに五障あり、ほかに三従あり。五障というは、一には梵天王となりて高台の閣に居ず、二には帝釈となりて善見城にたのしまず、三には魔王となりて第六天にほこらず、四には轉輪聖王となりて七宝千子を具せず、五には仏身となりて八相成道をとなえず。三従というは、いとけなくしてはおやにしたがい、さかりにしては夫にしたがい、おいては子にしたがう、これなり。されば樂天のことばには、「ひとにうまれて婦人の身たることなかれ、百年の苦樂は他人によれり」といいて、万事ころにまかせず、一生ひとにしたがうよしみえたり。

（『真宗聖教全書』三・一二〜一三頁）

となつています。

ここで女達がなることができないとされている「梵天王、帝釈、魔王、轉輪聖王、仏」の五つの者は、それぞれの世界（天界・魔界、世間・出世間）の最高位の者であり、主権者、独立者であることを意味していると思います。

では、それらの者になぜ女達は



なれないのでしょうか？

それは女達の身は三従の身だと言われるからです。例えば、大乘仏教の百科全書といわれる『大智度論』に、

女身にして転輪聖王と作ること
は是の処（ことわり）なし。何
となれば一切の女人は、皆な男子
に属して自在を得ざればなり。
女人は尚ほ転輪聖王と作ること
すら得ず、何に況んや仏と作る
をや。若し女人が解脱涅槃を得
れば亦た男子に因つて得、自然
に道を得ること有ること無し

（『国訳切経』釈経論部二・二二三頁）

と説かれています。女はいつも男に
従属して自在ではないので、独
立者たる仏にはなれないというこ
とです。ですから五障説は三従説があつ
て初めて成り立つものと言えます。

では次に、この三従ということは
どこからくるのでしょうか？それは
女達の性分で、生来からの自然な
姿なのでしょうか？

もともとこの三従説は仏教が独
自に説いてきたものではなく、仏教
以前、あるいは同時代にすでにイン
ド社会の規範としてあつた考え方を、

仏教が無批判にそのまま取り入れ
たものと言えます。紀元前後に、
それまで多年にわたつてインド民衆
の間で行われてきた慣習を成文し
集めた『マヌの法典』（田辺繁子
訳・岩波文庫）には、この三従が「婦
人の義務」として挙げられているこ
とはすでに有名です。

少女、或は若き婦人、或は老女
は、何事をも独立にてなすべか
らず。たとへ、家庭の用事とい
えども。

【第五章・一四七】

婦人は幼にしてその父に、若き
時はその夫に、夫死したる時は、
その子息に従ふべし。婦人は決
して独立を享受すべからず。

【第五章・二四八】

つまり三従は、女達への義務と
してあえて「つくられたもの」であつ
て、決して女達の生来の性分など
を言い当てたものではありません。

またその一方で、男達には

婦人は、たとえ、この（世）に
於て注意深く監護せらるるとも、
男子に対するその熱情により、
移り気により、而して生来の薄
情によりて、彼等の夫に背くも

のなり。

【第九章・二五】

生主が（婦人の）創造に際し、
賦与したる本性のかかるものな
るを知りて、男子は（彼女等の）
監護に対し、最善の努力を尽く
すべし。

【第九章・二六】

と、女達への監護が義務付けられ
ています。「たとえ弱き夫たりとも、
その妻を監護せんと努むるなり」
【第九章・六】と叱咤激励されてい
ます。

男達に従属すべき女達、女達を
監護すべき男達。このように女達
と男達が対峙させられることによつ
て成り立つ支配構造、その維持の
ために三従説は意図的につくられた
ものです。それを仏教も無批判に
取り入れ、インド・中国・日本へ
の仏教伝来とともに、男達の思い
と相俟つて流布されてきたものと言
えます。

ですから、五障三従説は仏智に
よつて明らかにされた真実などで
はありませんし、それを根拠とす
る「変成男子」という考え方も仏
意に随順するものとは言えないと
思います。

2つの流れが交わるように

Essay

藤沢 紹子

大阪教区第20組頓随寺住職

私のまわりの男性たちの中で、僧侶であつても、家事や育児に参画している人たちに会おうと、私がこの人たちに感じるのは、観念的になりにくい、しなやかさです。

又、私のまわりの女性たちの中に、坊主であつても、一人の僧侶として活動しようとしている人たちが、あるいは様々な活動に前向きに参画しようとしている人たちに会おうと、私がこの人たちに感じるのは、生き生きとした情熱です。

自分らしく生き生きと生きることを抑圧されてきた女性たちが、そのことに気づいて声をあげてきた、その声を聞き届けて、あつ自分たちも「男らしさ」に縛られていたな・・・と気づいてほしいのです。

男は、強くたくましく、泣いてはいけない、女性を守り責任を取らねばならない、などなど。そんな縛りから、暴力に走ったり、また自殺に追い込まれたりということもあるようです。そんな男性の相談を受ける、メンズ・センターはスタッフが足りなくらいだそうです。私たちはいつも、加害者であり被害者なのです。

「男らしさ」「女らしさ」の規範は、時に私たちを息苦しくさせ、悲しませます。女性が活動しようと

すると、「女はでしゃばるな」というメッセージが発せられることがあります。身も心も固まります。共に意見を交わしあい、一緒に歩んでゆこうというメッセージが発せられると、身も心もリラックスしてエネルギーが沸くのです。

オランダで、失業対策として始まったワークシェアリングは、仕事を多くの人と分かち合っていくというものです。男も女も、フルタイム働かずに0・75の仕事をし、残りの時間を家事・育児に当てること

によって失業率も下がり、男女平等参画もスムーズにいきます。男女ともに仕事に育児に、ゆつたりと向き合える、とても興味深いあり方です。

主従の関係や、上下の関係、あるいはどちらかがリードしてどちらかがついていくというのではなく、傍らを歩きつつ共に歩んでいく、そんな関わりがしたいと念願します。親鸞聖人が「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、親鸞一人がためなりけり」(『真宗聖典』六四〇頁)と受け止められたその「二人」の発見、それが「御同朋御同行」のあり方につながるものと思われまふ。誰もが同じ重さをもった存在であり、その一人と二人がであることを願われていることだと思ひます。

女性が良妻賢母像に閉じ込められるようになったのは、そんなに長い歴史があるわけではありません。主に近代以降のことです。坊主像もそうでしょう。中世の女性である恵信尼さんは、自立した二人の念佛者として生きられたということです。私たちはどうでしょうか、夫Ⅱ住職、妻Ⅱ坊主、長男Ⅱ候補衆徒、という寺族像に縛られて、役割を固定化し、自由な関係性を見失つてこなかったでしょうか？これからは、それぞれの状況の中で、さまざまあり方を模索していくことが必要だと思われまふ。

女性も前を向いて風を受け「一人」として歩んでゆきたい、男性は眼をおろして生活に足をつけてほしい。そんな二つの流れが交わるところに、着実に、しなやかに、情熱をもつて、共に解放されてゆく道筋を見出してゆけるのではないのでしょうか。そうして、「御同朋御同行」ともともに歩んでゆきたいと思ひます。



女の
ささやき

カノジョとボクの共同参画

土屋 慶史

真宗大谷派全国仏教青年同盟委員長
岡崎教区第35組成真寺候補衆徒

Essay

「私はお寺と結婚するんじゃないの。よっちゃん（ボク）と結婚するのよ。」

結婚前、無邪気にそう語るりえちゃん（カノジョ）を前に、ボクは口ごもるしかありませんでした。近代教育を受け、一般企業における労働を経験してきたカノジョにとって「準坊守」（注）という立場は、奇異にも映る習慣がまだまだ色濃くあり、想像以上にストレスが多かったようです。いわく、「居場所がない」「私が私でなくなってしまう」「どうして、子どもが女の子じゃいけないの」等々。「りえちゃん、大好きだよ。愛しているよ」と100回言っても、慰めにすらなりえませんでした。

転機が訪れたのは次女の自宅出産でした。台所のシンクの前で、ボクが仰向けに分娩台となり、カノジョを上に乗せ、ようやくオムツがとれかかった長女のエールと歓声のなか、次女をこの世界に迎えました。その台所のタタミ2畳ほどの板の間が広いお寺の敷地のなかで「自分の居場所」と初めていえる場所だったそうです。それからしばらくすると「子育てと葛藤しているお母さんたちの会をつくりたい」と言い出し、趣旨をカノジョにつくってもらい、チラシをボクが作り、寺院組織の枠を超え、自然食品店やエコ雑貨店にビラを置いていただき「自然派ママたちの座談会」という会を立ち上げました。月に一度、まずは勤行をし、地域で活躍して

いる地元の人たちをご講師に、ある時は「自然食」、ある時は「子どもへの虐待」、「ドメスティック・バイオレンス」、「エコ」等々、20代から30代のママさんたちを中心に様々なお話を聞き座談をします。最近では専業「主夫」さんが参加したり、同行してくるパパさん同士が子どもの面倒を見つつ、家事育児の会話に花を咲かせたり新しい時代の息吹を感じます。また、そんな参加者のみなさんが主体的に関わりだし、より多様な活動を始めました。

かつて、ボクがまだ独身だったころ、「寺院の運営に、女性や子どもも参加できる新しいシステムができないものか」と葛藤していましたが、呼びかけでも人は集まらず、しよせんは「脳内平等」の域を出ず、企画倒れもいいところでした。しかし、寺院運営の場において、ともすればもっとも権限が認められない「準坊守」のカノジョが、「自分の居場所」を確保し「自分のことば」を獲得し、たくさんの人たちと出会い始めたらお寺が変わっていきました。もちろんそれには、若い世代を育てようという意欲のある現住職や坊守の後押しがあつてのことでもあります。あ、そういえば一番、大きく変わったことがあります。

「よっちゃん！早く、夕方の勤行にいくよ！」

お寺の行事といえば、そのたびに頭痛や腹痛で寝込んでいたカノジョが、毎日の勤行のたびに長女や次女といっしょにボクを本堂に引きずっていきます。

組織やシステムの圧倒的な力と流れのなかで、最も声を、生きる力を弱められていた人が声をあげ、生きる力を回復することを、お寺が少しずつでも開かれていくことを本当に必要としていたのはほかの誰でもない、このボクでした。そして、なによりもカノジョや子どもたちとあーでもないこーでもないと葛藤しつつ生きていたら、いつのまにやら、家族揃ってご本尊の前に座ることになっていたのが不思議でなりません。

注・準坊守 候補衆徒（住職の後継者）の連れ合い

男の
つぶやき



『あいあう』とは…

この広報誌の名前である『あいあう』は、親鸞聖人によって書かれた『教行信証』（顕浄土真実教行証文類「行巻」の「今みなまた会して、これ共にあい値えるなり」〔真宗聖典一五九頁〕という言葉から名づけられました。

「遭遇うこと難し」とか「遇いがたくして今遇うことを得たり」という言葉もありますが、いずれにしても出遇いのよろこびが表わされているのでしょう。

日々の生活にあつて、わたしたちが“生きる”ということを考えてとき、それは、いろいろな人と声をかけあつてこそ“生きる”ということがなりたつていくといつても過言ではありません。しかし、時にその声が届かなかつたり、行き違つたり、そのためにいろいろな出会いをしているながら、まわりの人を見失っているのではないのでしょうか。

いま、その出会いそのものに出遇いなおすことによって、自然に向きあうことのできるつながりを回復していきたい。『あいあう』という言葉にはそんな願いがこめられています。あい、あう、女性室では活動を通してさまざまな出会いを積み重ねていきたいと思えます。

女性室活動報告

【スタッフ派遣】

- 7月21日 女性と仏教 東海ネットワーク参加
- 7月28日 本願寺派福井教区主催『仏教講演会』参加
- 9月27日 女性と仏教 東海ネットワーク参加
- 12月1日 奥羽教区男女共同参画推進実行委員会の講演会参加
- 12月6日 女性と仏教 東海ネットワーク参加
- 1月18日 女性と仏教 東海ネットワーク参加
- 1月21日 福井教区「女性差別公開講座」参加
- 2月18日 福井教区「女性差別公開講座」参加
- 2月28日 女性と仏教 東海ネットワーク参加
- 3月2日 熊本教区坊守研修会参加
- 3月15日 大垣教区「教区・組事業への女性の参画に関する学習会」参加
- 3月18日 福井教区「女性差別公開講座」参加
- 4月4日 久留米教区「男なり女なり委員会」主催公開学習会参加
- 4月18日 日豊教区「新人坊守研修会～四日市別院一泊奉仕研修～」参加

【公開講座】

- 12月11日 女性室公開講座三条会場
講師：太田清史さん
会場：三条教務所
テーマ：人と人とのつながりの中から（準備会6回開催）
- 6月3日 女性室公開講座山陽会場
講師：伊藤公雄さん
会場：山陽教務所
テーマ：「らしさ」って何だろう（準備会8回開催）

【女性室と教区との協議会】

- 1月24日 会場：宗務所第4・5会議室
12教区13名参加

【第7回女性会議】

- 4月10日 会場：研修道場 講師：山内小夜子さん
～11日 テーマ：真宗と人権 参加者40名

review

〈書評〉「男らしさ」から「自分らしさ」へ メンズセンター編

かもがわブックレット◆95 かもがわ出版 600円（税込）

この本に登場するのは、少年だった頃の「男の子でしょ」との格闘、父との確執、育児や介護、そして看護を体験することで見てきたこと、感情をうまく伝えられないことへの苛立ち、会社の中で見失った自分へのこだわりなどを通じて、暮らし方や生き方を再考しはじめた男たちの声です。

男の社会的な経験に共通する問題を「男らしさ像のゆらぎ」としてとらえ、「男らしさ」から「自分らしさ」へという大きな流れのなかに、男のつづやきが重なりあっています。私たちも一緒につづやいてみませんか？



the editor's notes

編集後記

◆「『メンズあいあう』を作りたい」と女性室では、だいぶ前から話題にしていたのですが、やっと実現することができました。「父親が亡くなった時に、泣けなかったことを後悔している。男は泣いてはいけない、ということに縛られていたと思う」とある男性が、自分の気持ちを語ってくれました。女性はもちろんのこと、もっと多くの男性に性差別のことを自分の問題として考えてほしい。『メンズあいあう』が気持ちを語り合う場になることを願っています。ご意見、ご感想などをお聞かせください。

（女性室スタッフ・藤場芳子）